慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾大学赤ちゃんラボと山本淳一先生との思い出
Sub Title	
Author	皆川, 泰代(Minagawa, Yasuyo) 白野, 陽子(Hakuno, Yōko) 直井, 望(Naoi, Nozomi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2022
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.93 (2022.) ,p.[80]- 87
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本淳一先生退職記念
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000093-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学赤ちゃんラボと山本淳一先生との思い出

皆川泰代[1]・白野陽子[2]・直井　望[3]

[1] 慶應義塾大学文学部
[2] 慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート
[3] 国際基督教大学教養学部アーツ・サイエンス学科

15 年以上の長きにわたり，山本先生とともに共同研究を続けてこられた皆川泰代先生は，発達障害のある子どもの脳機能計測など，世界に先駆けた研究を数多く発表されています。今回はそんなふたりの出会いや研究での思い出を振り返り，山本先生の持つ深い知識や高いスキル，受けた影響について聞きました。思い出話を通じて，山本先生のお人柄や研究に対する熱い思いを改めて感じました。

皆川泰代先生（以下，皆川）に，直井望（以下，直井）と白野陽子（以下，白野）がインタビューを実施しました。

直井：山本先生の研究活動を振り返るにあたり，思い出を語っていただきたいのですが，まず皆川先生の専門分野と研究内容について教えてください。

皆川：はい。私の専門分野は，言語心理学と発達認知神経科学で，研究については言語獲得を中心とした言語コミュニケーションの発達に興味があり，その言語獲得に伴う脳機能の発達を研究しています。

白野：山本先生との出会いについて，当時の印象を踏まえて教えてください。

皆川：私が最初に山本先生を認識したのは院生の時。ちょうど小嶋祥三先生が代表をされていた科研費の重点領域が「認知・言語の成立」という大きい領域で（文部省科学研究費補助金重点領域研究「認知・言語の成立」1993-1997），私はその分担者であった東京大学の桐谷滋先生の研究室の学生だったこともあり，色々な会議で受付などの下働きをしていました。その時にお名前を知った覚えがあります。今思えば，発達関連の大御所の先生がたくさん参画されていたプロジェクトでした。

直井：ということは山本先生との出会いは，結構前ですか？

皆川：1993 年ぐらいからの重点領域でしたが，おそらく一方的に認識したのは 96 年くらいでしょうか。その時期辺りから確か渡辺茂先生も入ってこられて，重点領域に入るかどうかの試験プレゼンみたいなことに，私も学生として参加していました。今考えてみると，渡辺先生もとても緊張されていたような感じがします（笑）。山本先生と初めて接点があったのが CREST（独立行政法人科学技術振興機構 CREST「コミュニケーション機能の発達における「身体性」の役割」2003-2008）。小嶋先生の CREST のメンバーになられていて，私がポスドクとして CREST に来る時に，山本先生と小嶋先生が受け入れ教員でしたが，その顔合わせで初めてお目にかかりました。

直井：出会いのきっかけになった科研費の重点領域は，『ことばと心の発達』シリーズ（小嶋祥三・鹿取廣人 監修「ことばと心の発達」ミネルヴァ書房）という本になった研究プロジェクトですか？

皆川：そうです。『認知・言語の成立』（第 11 回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編「認知・言語の成立－人間の心の発達－」クバプロ）もそうですね。

直井：あの本はすごく面白くて，今見てもすごく贅沢な研究者の先生方が書いていますよね。

皆川：そうそうそう。すごく豪華なメンバーでした。

直井：あの本で小嶋先生や桐谷先生のことも知ったし，山本先生のことも知ったような気がします。

皆川：重点領域を通して私が一方的に知っていたと言うか，知り合ったと言うか。

直井：ちなみに CREST に入る時は公募ですか？　紹介でしたか？

皆川：私すごく図々しくって（笑）。日本学術振興会特別研究員が終わるので次のポスドクを探さなくてはいけないときに，慶應で COE を取った話があって（慶應義塾大学 21 世紀 COE プログラム「心の解明に向けての統合的方法論構築」2002-2006）。国立身体障害者リハビリテーションセンターにいた時も，古屋泉さんなど渡辺研出身の研究員の方がいたから慶應のことは知っていて，小嶋先生が移られたとか，慶應が COE 取ったことも聞いていて。COE って NIRS などの色々なセミナーを開催していたので，そういった研究会に参加するようになって小嶋先生を通じてお伺いしたんです。「COE のポスドクに空きはないですか？」って。そうしたら小嶋先生が「渡辺さんに聞いてみる」と。でもその後ポストはないそうだ，と言われました。しかし，そこで小嶋先生が「CREST があるから」というので慶應の小嶋先生，山本先生との研究生活が始まりました。

直井：その時の慶應の混乱状態を覚えてます。「COE とった，すごいお金が取れたんだ」「脳の機械買うぞ」って。それで島津がいいか日立がいいかって話に入れてもらったものの，いざ装置が来たら誰も使い方を知らなくて（笑）。いろんなことをして「こういうのはとれてない」「こういうのはとれた」って。いろんな課題をとってみたけど，そもそもちゃんとしたデータを見たことないから，どれがとれた状態なのかもわからない。そんな「誰もあまり使いこなせてない」というところに，皆川さんが救世主みたいに現れたんです（笑）。

皆川：そうでしたっけ？

白野：NIRS を使って研究してくれる人が欲しくて先生が呼ばれたのかと思ってました。

皆川：でも実は COE じゃなかったという（笑）。初めて山本先生とお話しした顔合わせ会のテーマが「今 NIRS でどういうことができているのか」で，確かその時に山本ゼミの学部生がとったデータを発表されてたんですが，ちょっと「大丈夫かな？」と思うようなデータで（笑）。

直井：その時は全頭が測れるのがすごいと思っていたし，全頭しかとれないと思っていて，みんな全頭を測っていました。付けるのにも時間かかったり。そうそう，山本先生がすっごい痛がるんですよ。先生が課題の途中で「痛いからやだ」ってやめちゃったりして。でもいろんな課題をたくさん試しました。

皆川：全頭でなぜかタッピングしたり？

直井：知恵の輪とかもやったり。プロソディをやろうとしたら「音は取れないんだよ」とか言われて。なんだそりゃ？！って。

皆川：とれるとれる（笑）。しかもプローブを全部使ってましたよね？

直井：全部使ってました。加減も分からないから，プローブをすごく奥まで入れて～とか。

白野：山本先生と一緒に仕事するようになったのは CREST で慶應に来てからですか？

皆川：CREST からです。小嶋先生，山本先生が中村克樹先生の CREST の分担者で，NIRS を使って赤

ちゃんを計測するという話でした。

直井：それで「慶應キッズ」という定型発達の子どもをとることが始まったんですよね？

皆川：そうそう。私が来た時は，小嶋先生のゼミは大人でとりたいと言う人がいて，山本先生のゼミは子どもに興味があったので，直井さんを始めとする山本ゼミの学生さんと一緒に「慶應キッズ」という，今の赤ちゃんラボみたいなのを少しずつ始めたような感じです。

直井：確かに「大人をとりたいなら小嶋ゼミで」というのはありましたね。

皆川：山本先生からは，直井さんみたいな学生さんを通して間接的に学ぶことも多かったです。

白野：当時の直井さんのポジションは院生ですか？

直井：私は院生で D1 かな。ずっと脳をとりたいと思っていたけど，侵襲的なことや解剖はできなくて，なんかとれたらいいなと思っていたら COE で NIRS が来たけど，全然誰もとれなくて。でも最終的に発達障害の子どもを計測したいという研究室の目的もあったし，自分の興味もあったので，まずは赤ちゃんからって里子に出されたような感じです。

白野：山本先生との共同研究はそれが始まりなんですね。

皆川：そうですね。

直井：その CREST が終わった後は？

皆川：私が CREST で 2 年間くらいポスドクして，ヨーロッパへ行って帰ってきた頃には GCOE が始まっていて（慶應義塾大学グローバル COE プログラム「論理と感性の先端的教育研究拠点」2007-2012），その頃には山本先生も発達チームの一番上の方だったから，そこの研究としてやっていた感じです。

直井：GCOE に入る時はすんなり？

皆川：そこはすんなり（笑）。

直井：今思い出しても COE から GCOE の期間って院生としては夢みたいでした。盛り上がっていたし，バブルだし。

皆川：確かに。当時の COE，GCOE で育てられた人は結構いるような気がします。私をはじめ，それこそ今の心理学専攻の伊澤栄一さん，寺澤悠理さん，兎田幸司さんもそうかも知れないですね。

直井：次に共同研究，著書を通じたエピソード，学問・臨床への貢献について教えてください。

皆川：やっぱり印象深いのは，NIRS を自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder, ASD）の子ども達に適用して，その研究を論文化したこと（Minagawa et al., 2009）。NIRS で ASD の子どもという意味で，多分世界で初めての論文だと思うんです。だからこそ印象深いし，私も発達障害の子どもにどう対応していいか，みたいなところがあったけど，それこそ直井さんを通して山本先生からも色々と教えてもらいました。

直井：楽しかったですね。いろんなプロトコルが開発されて，電話で苦手なものや好きすぎるものを事前に聞き取って，例えば時計が好きで，時計を見ると興奮しちゃうお子さんが来校する場合は時計を隠したり，嗅覚の研究の時は大学の建物の入り口からラボまでの道のりや計測の様子やスタッフをビデオに撮って送ったり。子ども達も「皆川さん」を覚えてきてて，妙にすんなり計測できるのを見て，勉強になりました。

皆川：その後の CREST でも直井さんが共同注意の介入（Naoi et al., 2008）をして，その前後で NIRS をとることを試みたり，あと CREST 以前に直井さんが縦断的に介入した NIRS 研究もありました。

直井：発達障害のある子どもの計測ができたのは，その前に膨大に赤ちゃんをとっていた (Naoi et al.

2012) からですね。逆に発達障害の子どもが難しいとは全然思わなくて「思ったよりスムーズに計測できる」と思ってました。

皆川：それこそウィリアムス症候群（Matsuda & Yamamoto, 2016）とか，いろんな子どもが来ました。山本ゼミの白野さん，今福理博君（武蔵野大学）をはじめ，学生さんが定型発達児の脳の発達に興味を持ってくれたこともあり，そういった意味で良い共同研究，いろんな研究ができました。白野さんや直井さん以外だと熊仁美さん（NPO 法人 ADDS）とか。山本ゼミの学生さんとはいろんな形で共同研究を行ってきたし，今でもリクルートで熊さんたちにお世話になってます（笑）。

白野：山本先生との交流で，発達心理学をはじめとする，先生方の専門分野にどのように貢献がなされたと思われますか？

皆川：そもそも私のバックグラウンドが言語学で，ある程度心理学の勉強はしていたけれど，慶應の心理学専攻に来て改めて心理学の知識を得ました。特に発達心理学や応用行動分析学は山本先生から学んだようなもの。今まで言語や音声学というアプローチでしか見ていなかった言語獲得を，もう少しコミュニケーション全般として，大きく「コミュニケーションの発達」ととらえる。大げさに言うとパラダイムシフト的な意味で影響を受けました。あと今やっているリスク児研究の流れも，元々は発達障害のある子どもたちのことを NIRS でいろいろ計測したことから。今でも定型の言語獲得に主眼はあるけれど，発達障害の子どもを見ると，見えなかったことが見えるというか。結局，定型の子ども達も同じような基礎は持っているから，そこを見ることで定型発達で何が起きているかが分かるということを，山本先生や直井さん，石塚祐香さん（筑波大学）と様々な発達障害の研究をしながら，だんだん気づいていきました。

直井：定型発達の子どもを見て言語発達を学んでくると，行動分析学は好き嫌いがあるというか，あまり好ましくないと思う人もいると思いますが，皆川さんはどうでしたか？

皆川：はじめはちょっと不思議でした。こんなことでできるの？って（笑）。でも行動分析学みたいな学問を勉強してみると「そういう仕組みか」と。今でもどちらかと言うと，より小さい子どもに効くアプローチだろうと思うし，それを上手く使えばいろんな言語の問題を解決できたりするんだろうな，と思っています。

白野：認知心理学と行動分析学は哲学が違うというか，反目しあうような部分もありますが，山本先生と皆川先生は共同研究として，一緒にうまくやれているのはすごいですね。

皆川：もしかしたら心理学の知識として授業を受けて「こういう考えとこういう考えがあります」みたいに学ばなかったから，うまくいったのかも知れないですね（笑）。

直井：例えば言語学のバックグラウンドの方，ノーム・チョムスキー（Noam Chomsky，1928-）の理論とは戦わなかったんですか？「言語は自然に獲得されるでしょう」みたいな？

皆川：私のポスドクの時のボス，エマニュエル・デュプー（Emmanuel Dupoux）はジャック・メーラー（Jacques Mehler）の弟子なので，私はその孫弟子みたいなもの。ジャックは割とチョムスキー派だったけど，弟子たちはそんなことはなく，むしろ逆の流れでした。チョムスキーのオリジナルの一番の極端な考えは，ほとんど古典の世界ですね。

白野：ほかに山本先生から影響を受けたことはありますか？

皆川：筑波大学の鈴木健嗣先生のチームを紹介していただいたことでしょうか。鈴木先生と山本先生が知り合いで，鈴木先生が CREST（独立行政法人科学技術振興機構 CREST「ソーシャル・イメージン

グ：創造的活動促進と社会性形成支援」2014-2019）を立ち上げる時に認知神経科学の役目をもらい，そこから工学的アプローチの研究も一緒にできるようになりました。そういえば直井さん，初代のポスドクでしたよね？

直井：でした（笑）。そう思うと山本先生は学問に，どちらが上とか下というのもないし，態度にも出ない。多分本当に思っていないから，いろんな人と結びつきやすいですね。

皆川：CREST の大きい会議でもいろんなことを話されていて，同じ心理の立場で聞いていても「なるほど」と納得するような，勉強になることも多かったように思います。先生の発言が工学の先生達にも役立っているのも想像に難くないし，それがムーンショット（内閣府ムーンショット型研究開発制度「活力ある社会を創る適応自在 AI ロボット群」2020-2024）にもつながってるんじゃないかと思います。

白野：教育者としての山本先生はどうでしょうか？

皆川：直井さんはマスターから山本先生の所でしたっけ？

直井：そうです。サルの研究しているボークレール先生（Jacques Vauclair）の授業を夏期に受けていて。この方は『動物のこころを探る』っていう本を書いた先生。先生の授業中に「心の起源っていうシンポジウムをやっているからみんなで聞きに行こう」となって，そこで山本先生が発表をしていました。「この人がやっているような研究がやりたい！」と思ったのがきっかけです。その時，山本先生は筑波大学だったので，筑波大学の大学院を受けようと思って色々調べていたら，ちょうど坂上貴之先生（慶應義塾大学）の研究室の飲み会をやっていて。

皆川：あのお茶飲み場で？

直井：お茶飲み場じゃなく坂上先生のお部屋（笑）。飲んでいるときに「君は将来どうしたい？」と聞かれたので「山本淳一先生のところの大学院を受けようと思っている」と言ったら「数ヶ月待ったら君にすごくいいニュースがあると思う」と。そう言われたものの全然見当がつかないし，筑波大学の大学院って教育学や他分野の勉強もしなきゃいけない。それに筑波ってどんなところ？と思っていたら，4 月に山本先生が慶應にやって来た。

皆川：（笑）それは学部何年の時？

直井：4 年生の時。でもメールして，先生の研究室を受けたいと言っても全く返事が来ないから，授業終わりに待ち伏せして，教室から出てきたところを捕まえて，という流れです。

皆川：直井さんは学部のそのあたりから「人」でやりたいと？

直井：発達障害の子どもたちの研究をしたいとは思っていました。白野さんは？

白野：私は学部のゼミ選択です。発達をやりたい，でも梅田先生の授業も楽しかったし，脳もできたらいいし，赤ちゃんもやりたいと思っていて。発達に行くか，神経に行くかを悩んでいた時に山本先生に話したら，皆川先生がいるという話をされて，「うちに来れば，そういうことやれるから」って。それで山本先生のところに行こうと決めました。卒論は主に皆川先生に指導してもらいましたが，山本先生は基本的なアドバイスをいろいろくれました。相談に行くと喜んで相談に乗ってくれたのでありがたかったです。例えば研究倫理のことをしっかり教えてくれたり，プレゼンの方法だったり。ゼミの発表も緊張感があって，プレゼンがしっかり時間内に終わるようにとか，そういうことを教えてくれました。

直井：そうだ，山本先生は発表をしっかりやる，ということにかなり気をつけていましたね。かなり長

い期間パワポがうまく動かないとか，発表資料が消えることを恐れていて，私，山本先生が発表するときは毎回発表資料を OHP とかに印刷して持っていっていました。

皆川：慎重な山本先生（笑）。

直井：Windows XP になる前は Mac や Windows でパワーポイントが開かないことが起こる時代で「あんなことになったら大変だ」って，常に発表の OHP に印刷する係をしていました。データファイルをふたつ持つのは当然。でも OHP を実際に使ったことは一度もなく，日の目を見ることはありませんでした。

白野：山本ゼミの人が用意周到に準備しておくのは，先生の教えなのかも。私がよく覚えているのは，学部 3 年で山本先生のゼミ入って「最初の論文発表は僕がみんなの興味に合わせて論文を選んで渡す」と言われたんです。私は「乳児の言語発達に興味がある」と言ったら，パトリシア・クール（Patricia Kuhl）の音声知覚に関するレビュー論文を渡されて「君は日本のクールを目指しなさい」って（Hakuno et. al., 2017）。

皆川：山本先生って卒論を「これは NeuroImage（脳機能研究の学術誌）だ」とか，すごく大きいことを言われますよね。

白野：「やるなら世界に通用する研究をしなさい」ってことだと思うんですけど「ゼミに入ったばっかりで右も左も分からないよ，私」って。

直井：確かに「世界のナントカ」とか「日本のナントカ」は，よく言っていた気がします。

白野：そうそう。あと「とにかく論文を書きなさい」とよく言われた気がします。皆川先生はそういう思い出はありますか？

皆川：今思ったのですが，もしかすると山本先生の「NeuroImage だ」の言葉で私は今福君の卒論研究を NeuroImage に出す（Imafuku et al., 2014）つもりになったのかも。出版できたのは白野さんの汗と涙の追加データ収集のお陰でもあるのですが。なのでやはり大きな目標を口に出すのは大事なのでしょうね。あと「大きい話」に関連して，山本先生は話の端々でアゲるというか，強化してくるのをすごく感じるので，褒め言葉は差し引いて聞いている気がします（笑）。

直井：私もそれは心に鍵をかけて聞いて，反応しちゃいけないと思っていました（笑）。先生のお弟子さんは，みんなそのスキルを持っている気がします。あとはどんなことがあったかな。合宿とかって行ってないですか？

皆川：合宿は行ってないけれど，カラオケとか？

白野：そう。意外と先生はノリがいいですよね。

直井：そうそう。すごくノリがいいし色々器用ですよね。あとすごく運動していたり。めちゃくちゃ忙しいのに水泳で何キロ泳いできたとか。

白野：そうそう。体力がすごいんですよ。スキー合宿に行ったときも，三日間くらい朝早くからナイターまでほとんど休憩なしでずっと滑り続けてびっくりしたのを覚えています。

皆川：それはすごい。あと山本先生といえば，先割れシューズ。指の（笑）。あれを見ると，先生はランニングとか定期的にされているんだな，って思います。

直井：国際学会に参加中もランニングされていましたね。逆にお酒の話はあんまりないですね。酔っ払いすぎて，という話もないですし。ご家族の話で覚えていることはありますか？

皆川：ご家族の話だと山本先生のお子さんが NIRS の被験者になってくれたことでしょうか。

図 1．慶應義塾大学赤ちゃんラボのインタビューメンバー（左から直井，皆川，白野）

直井：懐かしい！！思い出話は尽きませんが，最後に山本先生にメッセージをお願いします。

皆川：長年お勤めお疲れ様でした。先生との共同研究で色々と影響も受けましたし，私の研究にも本当に色々役立っていると言うか，活かさせてもらっているようなことがあります。本当にありがとうございます。共同研究する中でも，研究領域が近かったことや，場所も近かったので，お部屋や装置の使用などで私が迷惑をかけたり，強気で交渉してご迷惑をおかけしたかもしれません。山本先生なら理解してもらえると甘えていました。甘えながら研究を続けさせていただきました。臨床と基礎を両立されている方はまだまだ少ないので，65 歳で退職されても研究を続けられ，まだまだ後進を育ててください。

引用文献

Hakuno,Y., Omori,T., & Yamamoto, J., & Minagawa, Y. (2017) Social interaction facilitates word learning in preverbal infants: Word–object mapping and word segmentation. *Infant Behavior and Development, 48*, 65–77.

Imafuku, M., Hakuno, Y, Uchida-Ota, M., Yamamoto, J. & Minagawa, Y. (2014) “Mom called me!” Behavioral and prefrontal responses of infants to self-names spoken by their mothers. *NeuroImage*, *103*, 476–484.

Matsuda, S. & Yamamoto, J. (2016) Emotion comprehension in intramodal and cross-modal matching: A preliminary comparison between children with autism spectrum disorders and those with Williams syndrome. *Journal of Special Education Research*, *4*, 1–8.

Minagawa,Y., Naoi, N., Kikuchi, N., Yamamoto, J., Nakamura, K., & Kojima, S. (2009) Cerebral laterality for phonemic and prosodic cue decoding in children with autism. *Neuroreport*, *20*, 1219–1224.

Naoi, N., Minagawa,Y., Kobayashi, A., Takeuchi, K., Nakamura, K., Yamamoto, J., & Kojima, S. (2012) Cerebral responses to infant-directed speech and the effect of talker familiarity. *NeuroImage*, *59*, 1735–1744.

Naoi, N., Tsuchiya, R., Yamamoto, J. & Nakamura, K. (2008) Functional training for initiating joint attention in children with autism. *Research in Developmental Disabilities*, *29*, 595–609.

Yamamoto, J. Yamamoto, J. (2015) Gaze behavior of children with ASD toward pictures of facial expressions. *Autism Research and Treatment*, Article ID 617190, 8 pages.

著者紹介

皆川泰代（みながわやすよ）慶應義塾大学文学部 教授

Uchida-Ota, M., Arimitsu, T., Tsuzuki, D., Dan, I., Ikeda, K., Takahashi, T., & Minagawa, Y. (2019) Maternal speech shapes the cerebral frontotemporal network in neonates: A hemodynamic functional connectivity

study. *Developmental and Cognitive Neuroscience*, 39, 100701.
皆川泰代・安井愛可・直井望・山本淳一・鈴木健嗣 (2017) 発達認知神経科学における fNIRS の応用：定型・非定型発達脳を可視化する．高次脳機能研究，*37*, 174–180.

白野陽子（はくのようこ）慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート特任助教

Hakuno, Y., Hata, M., Naoi, N., Hoshino, E., & Minagawa, Y. ,(2020) Interactive live fNIRS reveals engagement of the temporoparietal junction in response to social contingency in infants. *NeuroImage*, 218:116901.
Hakuno, Y., Pirazzoli, L., Blasi, A., Johnson, M. H., & Lloyd-Fox, S. (2018) Optical imaging during toddlerhood: brain responses during naturalistic social interactions. *Neurophotonics*, *5*, 011020.

直井望（なおいのぞみ）国際基督教大学教養学部アーツ・サイエンス学科上級准教授

Naoi, N., Minagawa, Y., Yamamoto, J., & Kojima, S. (2022). Infants' prefrontal hemodynamic responses and functional connectivity during joint attention in an interactive-live setting. *Frontiers in Medical Technology*, *4*. 1–13.
直井望・山本淳一（2007）乳児への語りかけ：対乳児音声への発達心理学的アプローチ 小児科，48，419–425.